

一步を踏み出す勇気と決断

物質化学工学科 嶋田 豊司

1. 読書から得られる豊富な知識

平成 25 年度の物質化学工学科の特別講演会を新年 1 月 9 日に実施した。その講師として本校 2 期生の百瀬隆氏にお願いした。百瀬氏は、現在株式会社ダイセルの知財センター長の他、大阪大学、大阪府立大学、早稲田大学など 5 大学で非常勤講師を務められ精力的に活躍されている奈良高専の大先輩である。講演の中で、年間 100 冊を読む習慣を 30 歳から続けていてその数は、すでに 3000 冊以上に及んでいるとのことである。百瀬氏は、東工大で修士課程を修了後、30 歳で渡米し、イリノイ大学で MBA を取得されている。またその 4 年後、同じく東工大で博士の学位を取得されて、ダイセルに入社された後、38 歳の時に会社からの要請で、米国での特許訴訟の責任者として再び渡米されている。弁護士との折衝を行う傍ら、米国弁理士試験にも合格されている。私はその多分野にわたる学業意欲と向上心、それと米国での特許訴訟という途轍もない大役の受諾など、その意欲はどこからくるのか尋ねてみた。その答えは、いろいろ経験することにより少しずつ培われてきた自信であろうということであった。もちろん何事にも意欲的な性格は百瀬氏の生来のものかもしれないが、目の前に次々現れる壁を乗り越えてみようとする意欲は、学生の皆さんにとっても、将来の指針になることは間違いない。また、読書から得られる豊富な知識が自らの自信を上げることとも間違いないであろう。高専で学ぶ皆さんにとって、ほとんど全てが新しいものとの出会いであるはずである。その時々で躊躇もするかもしれない。しかし、一步を踏み出す勇気と決断こそがこれからの自分自身にフィードバックされることを忘れてはならない。悩んだとき、加藤諦三氏の本を手にとってみるのも助けになるかもしれない。

2. 技術立国日本？

電子立国日本の自叙伝という NHK の番組が 1991 年に放送された。まさに日本が世界のエレクトロニクスを発展を牽引してきた確固たる歴史を紹介する番組であった。しかし、現在、残念ながら韓国、中国、台湾などアジア諸国の追従をゆるし、優れた技術者の何割かは海外で活躍するようになり、追い越された科学分野も多くなってしまった。その要因の一つに若者の消極性があるようではない。OECD の 2013 年度の調査によると海外に留学している学生の割合は 1.0% で 33 カ国中ワースト 2 位である。これは留学しなくても日本の技術力が進んでいるという解釈もできなくはないが、内向き、消極性の増加、などと揶揄されることも否定できない。高専生を見ているとまだ、積極性を持つ学生はいると胸をなで下ろす反面、その割合は減少しているように感じる。これは今後の日本にとって決して良くはない。積極性を持つためには小さなことから始めればよい。例えば、公の場で質問できるだろうか。ある程度の知識を持たないと勇気が出ない。まずは、そんなことから始めてみてはどうか。一つ階段を上る感覚が得られるかもしれない。

アジア諸国の躍進と言え、私の化学分野では、世界のトップ誌と言われる Journal of the American Chemical Society (JACS) 誌の掲載論文数は (阪大の福住先生の調査)、2009 年の日本の掲載数は 458 報で、韓国と中国を合わせれば 344 報である。この数字は決して安心できる数字ではなく、1999 年では、韓国と中国で合計わずか 22 報であった。2009 年以来日本の研究費は減少し、各国が予算を増額していることを考えれば、2014 年のデータは恐ろしい気がする。これからの日本を支える君たち学生の皆さん、一人一人の積極性が日本を再生させる重要な鍵になり、発展的日本が構築されることを念じてやまない。